

その他

暮らして見た普天間

はじめに

一 普天間で暮らす

(一) ドーナツシティ宜野湾

(二) フェンス沿いを歩く

(三) 基地・普天間

(四) 神話のなかの沖縄

二 基地と市民生活

(一) 暮らしのなかの普天間基地

(二) 基地と大学

(三) 宜野湾市役所

植
村
秀
樹

(四) 基地をめぐる攻防

三 基地をめぐる政治

(一) 知事の埋め立て承認

(二) 名護市長選挙

(三) 政治とカネ

おわりに

はじめに

二〇一三年九月から翌年の三月までの半年余りの間、沖縄県宜野湾市で暮らした。本学の教員留学制度を利用して「国内留学」の機会が得られたからである。数えてみると、私に与えられたのは二百十三日であったが、準備に二週間ほど要したため、半月遅れで発ち、期限の三日前に戻ってきた。よって都合百九十五日間をにか宜野湾市民として過ごしたことになる。そのうちの十日間ほどは、帰省や出張などで沖縄を離れていたため、沖縄にいたのは正味百八十五日である。

宜野湾はいわずと知れた普天間基地の所在地である。より正確に言えば、アメリカ海兵隊普天間飛行場である。私は、基地に隣接する沖縄国際大学に法学部の研究員として受け入れてもらい、研究に取り組む機会を得ることができた。研究テーマはもちろん海兵隊を中心とした米軍基地の問題である。

沖縄の米軍基地問題というと、特に本土では、大きく二つの見方、捉え方がある。まずひとつには、これを沖縄の問題と捉え、他人事として受け流す。沖縄の経済は基地に頼っており、基地に反対する運動をしている

人も少なくないが、多くの人は基地との共存を求めているという見方も根強い。なかには反対運動も実はカネ欲しさにやっている、とする見方まである。もうひとつは、米軍基地を国家安全保障の問題という枠組みでとらえ、それは中央政府の専管事項であり、地方自治体やその住民が口を出すことではない、特に米軍基地は日本の安全に不可欠というのもある。さらにつけ加えれば、私の留学生活の主要な課題である普天間飛行場を含む海兵隊の沖縄駐留もまた、日本の安全にとって欠かすことのできないもの、という意見である。

このような見方は正しいのだろうか。私はこのいずれにも納得しておらず、特に前者は誤解に基づいているのではないだろうか、と思っていた。そこで、こうした問題を考えるために、大学に籍を置くと同時に、基地の近くに部屋を借りて、そこで暮らしながら考えてみることにした。

本稿は、その半年あまりの生活の記録の一部である。副題をつけるなら「沖縄海兵隊問題研究序説」としたいと思う。生活のなかに基地がある、あるいは、基地のある暮らしとはどんなものだろうか。考えてみるだけではわからない。身をもって文字通り体験するほかない。本土にいて、安全保障問題として、頭で考えた理論上の海兵隊ではなく、実際に日々の暮らしのなかにある基地を知らずして、この問題を論ずることはできない、と思うからである。

一 普天間で暮らす

(一) ドーナツシテイ宜野湾

「普天間よ」

宜野湾市に半年余り暮らすことになった私は、普天間について多少なりとも下調べをしておこうと思いが

らも、その前に終えておかなければならない仕事がなかなか片づかず、ほとんど何もできないでいた。そんななかでほとんど唯一といっていいささやかな「予習」は、大城立裕の短編集『普天間よ』（新潮社、二〇一一年）を読んだことである。一九六七年に「カクテル・パーティー」で芥川賞を受賞し、「小説・琉球処分」などで知られる大城の同名の小説「普天間よ」には、私の知らなかった、そして知っておくべき普天間があった。また、同書におさめられている別の小説には、沖縄で「慰霊の日」とされる六月二十三日を「軍司令官と参謀長が野戦に何万という敗残の兵士を置き去りにして自決した」日と記している。よく知られている「ひめゆり部隊」の悲劇も、この司令官が置き去りにして以降におきたものである。悲惨な沖縄戦の一面を大城は、日本軍の無責任さを撃つ鋭い言葉で表現している。

さて、その小説「普天間よ」には実に興味深いことが書いてあった。今では海兵隊の基地になっている場所には、かつて美しい松並木があったこと、そして、ある集落の住民らは、一九四五年四月の米軍の侵攻に際して、地下に広がる洞窟に避難し、抵抗をせずに「降伏」した。そうすることによって生き延びることができた人が多かった、というのである。戦闘員（軍人）ではないので、「降伏」というのはおかしいのだが、要するに米軍の侵攻に対して抵抗することなく、その管理下に入ったということである。その後は地元をはなれて収容所に入れられた。

小説とはいえ、沖縄出身の大城が、沖縄戦に関連して史実に基づかないことを書くはずはないだろうが、これを確かめなければならぬと思った。

「ドーナツタウン・フティーマ」

沖縄に来てまもなく、面白い本に出会った。宜野湾市商工会ぎのわんブランド策定委員会の企画で編集され

た『PUTENMA 360°』というその本は、「ドーナツ」のようなかたちをした宜野湾市をその特徴から「ドーナツタウン・フティーマ」という架空の街にしたてて、その魅力を紹介している。

宜野湾市は、普天間基地を中心にドーナツ状に市街地がある。市の北東にある市役所から、南西にある警察署へ行くには、基地の周囲をぐるっと半周する。東京都千代田区も皇居を中心とするドーナツ状の街だが、宜野湾市は、この東京の千代田区と中央区を合わせた区域の真ん中に、皇居の3倍以上の「禁中」があるイメージだ（オフィスユニゾン編『PUTENMA 360°』ヨブリオユニゾン、二〇一〇年）。

宜野湾がどんなところか、これで少しは想像がつくだろうか。地図で見ると、宜野湾市はパイアの断面のような形をしている。その中央部にあるのがアメリカ海兵隊の普天間飛行場である。滋賀県の真ん中に琵琶湖があるが、それに似ているともいえる。基地を市街地や住宅地が取り囲んでいるのである。普天間基地は琵琶湖よりも丸く、たしかにドーナツに見える。そして「禁中」（皇居）と同じく、真ん中部分には一般市民は立ち入れない。反対側に行くためには、ぐるっと半周しなければならない。ところで、「フティーマ」とはもともと地元の人たちの発音をまねて、アメリカ兵が普天間をこう呼ぶようになったという。

米軍が何もないところに基地をつくつたら、カネ目当てに人が集まるようになり、今のような状態ができたのか。結論を先に言うと、インターネット上でよくある無責任なデマなのだが、それだけでなく、当の海兵隊がそれを広めているという話も耳にした。沖縄に来て聞いた話では、それを広めているひとは、かつて日本の大学院で学び、沖縄問題の歴史を研究した論文で博士号を取得した人だという。その人は私も知っているのだが、

まさかあの人が、と耳を疑った。さらに驚いたのは、沖繩の若い人たちの間でも、この話を信じている人が少なくないということだ。

じのーんなんまち

沖繩に来てちょうど一か月が過ぎた十月十四日、普天満宮への琉球国王の参拝を再現する催しがおこなわれた。国王のこの神社への参拝は、一六四四年にはじまり、毎年九月（旧暦）におこなわれていたものだという。それははじめて再現するこの催しは、王と王妃の扮装をはじめ、往時を再現した豪華絢爛なものだ。当時の服装に身をつつんだ百人の宜野湾市民も加わって、およそ一キロを練りあるいた。沿道には多くの見物客が集まった。

近年、沖繩ではこうした琉球王国時代のことを再現するような催しが多くなっているようだ。琉球王国は「古き良き時代」とされているのだろうか。往時をしのぶ歴史絵巻を楽しむということだけでなく、基地問題への対応にみられるような日本政府、ひいては本土の国民に対する不満が、その背景にあるようにも思える。ここにもひとつの問題があると思うのだが、それはさておき、この行列は、歴史の再現と呼ぶうえには注釈が必要だろう。かつて国王一行が歩いた通りには宜野湾並松（地元の言葉で「じのーんなんまち」と呼ぶ）はもはや存在しない。参拝のために一行が通ったその街道には美しい松並木があった。普天満宮から南へ六キロほどの間に二千九百本あまりの琉球松の並木があり、一九三二年には国の天然記念物に指定されている。そのほとんどが消えたのは、一九四五年夏のことである。沖繩戦とそれにつづく基地建設が、宜野湾から松並木ともども人びとが暮らしていた集落をまるごと奪い去った。アメリカ軍の侵攻を前にして日本軍が、沖繩占領後はアメリカ軍が、それぞれの都合で切り倒してしまった。

「フティーマ」が地元の呼び方をそのまま文字化したものであるのと同じように、宜野湾は「ジノン」となる。書店や医院などに「じのん」を用いているところをしばしば目にするのはそういうわけである。

二〇一三年十月から宜野湾市立博物館ではじまった特別展「近代沖繩と宜野湾」に、その松並木の写真も何枚か展示されていた。

その松並木を伐採して基地を建設したことは、地元の人びとにとっては、戦後もつづく「鉄の暴風」にほかならなかっただろう。だからこそ、暮らしを奪われた人たちの故郷に対する郷愁はひととき強いものがあつた。それが「郷友会」を發展させることにつながつた。自衛隊関係の組織にも「郷友会」というものがあるが、こちらが「ごうゆうかい」であるのに対して、こちらは「きょうゆうかい」と呼ぶ。本土にもあるが、沖繩の郷友会を通じた人びとの結びつきはとくに強い。その多くは、沖繩本島に出てきている離島出身者の相互扶助のための組織である。代表的なもののひとつは、沖繩本島で暮らす宮古島出身者の集まりである。とくに宮古島出身者は数が多いだけでなく、結束力がつよく、選挙のときなどにも大きな力を發揮する。沖繩では、こうした「郷友会票」はかなりの影響力をもっているという。普天間をはじめ、米軍基地に家や土地を奪われた人たちがつくる郷友会は、またこれとは異なるものである。

沖繩の政治・経済の中心地である那覇からも遠くないこの地域は、戦後の復興と發展とともに人口が増えつづけ、現在の宜野湾市、ドーナツシティ・ジノンがかたちづくられた。

(二) フェンス沿いを歩く

基地の中の墓

普天間飛行場は、二千八百メートルの滑走路が南西から北東方向にのびており、それを取り囲むように敷地

全体があるので、地図で見ると、ラグビーボールを斜めに置いたようなかたちをしている。その敷地の南側に接するようにして沖縄国際大学のキャンパスがあり、わたしのアパートは、そこからやはり基地の敷地に沿うように南西方向にあるいて十分ほどのところである。一番近いところでは基地の敷地から直線で百メートル足らずであり、外の廊下からは駐機場が見え、部屋のベランダに出ると、滑走路の南端と滑走路へと続く誘導灯が見える。左方向に目をやると、嘉数高台公園の展望台が見える。嘉数高台公園は、普天間飛行場が一望できるため、マスメディアの撮影や政治家などが視察に訪れる、沖縄でも有数の「名所」である。

宜野湾市南部の嘉数あたりは、沖縄戦のなかでも激戦地のひとつであり、米軍はこの高台を攻略するのに手を焼き、「ごまごま丘」(dammed hill)と呼んだ。弾痕ののこる民家の塀の一部が保存しており、日本軍のトーチカものこっている。日本軍は米軍を迎え撃つために嘉数高台にトーチカを建設した。高台の一部が公園になっており、その最上部にある展望台からは、普天間飛行場の全体が見渡せるようになっていいる。配備してある航空機の説明などもついており、普天間基地を意識したつくりになっている。ただし、説明は古いままであり、まだオスブレイの説明にはなっていないかった。

「オスブレイ」とは猛禽類のタカの仲間であるミサゴのことであり、一九八〇年代に開発がはじまった新型輸送機V-22につけられた愛称である。使用する軍によって仕様が少しずつ異なっており、海兵隊のものがMV-22、空軍仕様がCV-22となっている。普天間には、二〇一二年十月に十二機、翌一三年八月にさらに十二機が配備された。ところで、十二機というのは、ひとつの飛行隊に配備される数であり、これを単位として運用される。オスブレイが配備される以前はCH-46「シーナイト」という中型輸送ヘリコプターがやはり二十四機配備されていたが、旧式化して退役することになったため、それをこの新たに開発された新型のオスブレイにおきかえたということである。

普天間で暮らしはじめて最初にしたことは、基地のフェンスに沿って歩くことであった。基地は全体が三メートル近い高さの金網のフェンスで囲まれているが、フェンスの外側は一メートルほど草が刈っており、ちよろど人がひとり歩くことができる。ところどころ通りづらい場所もあるのだが、とりあえず歩いてみることにした。

まずは佐真下ゲートまで行ってみた。普天間飛行場の出入り口のひとつが、沖縄国際大学（以下、地元の略称にしたがって「沖国大」とする）とわたしのアパートのちよろど中間地点にある佐真下ゲートである。入り口のフェンスには「米国海兵隊施設」の看板があり「無断で立入ることはできません 違反者は日本の法律に従って罰せられる」と日本語と英語で書いてある。

ゲートからフェンスに沿って歩いてみて、墓が多いことに気づいた。基地の南側から西側にかけて墓が点在している。仏教が根づかなかった沖縄では、当然ながら寺の檀家制度もない。沖縄では墓をあちらこちらに見かけるが、基地のフェンスの周囲にも数多く存在する。フェンスの内側、すなわち基地のなかにも、亀甲墓という大きな墓がいくつもある。先祖崇拜に篤い沖縄の人たちは、とりわけ墓をたいせつにする。先に触れた大城立裕の小説「普天間よ」にも、基地のなかに墓参りに行くという話が出てくる。

しばらく毎日のように、散歩がてら基地のまわりを歩いていたが、ある時、歩いているうちに日が暮れてしまった。公園の入り口に「ハブに注意」との看板があったことを思い出し、夜行性のハブの活動時間が始まるのかと思うと落ち着かなくなった。ハブに遭遇することはこのあたりではめったにないことだと、後で近所の人に聞いたのだが、それでもそれ以来、夕方はやめて、朝、日が昇ってから歩くようにした。東は「いこいの市民パーク」の少し先、西は大山ゲートまで行き、おおむね基地の周囲を三分の一ほど歩いたところで、フェンス沿い散歩は一旦、中断することにした。

基地周辺の散歩で見つけたものは墓だけではない。基地のすぐそばにあるアパートの壁には「普天間基地見物のための立ち入りを禁ずる」とあった。基地がよく見える場所を探して立ち入った人が多くいたことを示しているが、そうしたものを見つけたのは、何をかくそう私も散歩のついでに、基地のよく見える場所を探していたからである。

また、基地の周辺で、「沖繩防衛局 住宅防音工事現場」という小さな看板がかかっている住宅を見かけることがある。基地の騒音対策なのだが、全室に防音工事をしてくれるわけではないらしい。地域によって、一室しか工事をしないところもある。うるさいときは、家族全員その部屋にあつまってやりすごせということなのか。それも指定されている区域内に一九八三年までに居住していた人にかぎられている。それ以降に来た人は、騒音を承知のうえで越してきたということ、防音工事の対象にはならないという。ちなみに、本土でも同様の防音工事をしているが、神奈川県藤沢市に住む知人の家は、工事しても何の効果もなかったそうだ。そして、工事後にその効果を確かめることもしなかったという。

ある時、基地周辺の散歩の途中で宜野湾公民館の前に出た。宜野湾市のなかに字宜野湾という集落があり、その公民館である。公民館の前には「昭和十九年当時の字宜野湾地形図」が展示してある。松並木を中心として家々が立ち並び、それぞれの家が屋号で示してある。こうした集落がかつて基地のなかにあったのだ。役場、郵便局、学校などがあり、このあたりが戦前の宜野湾村の中心地であったことがわかる。米軍に接收された土地に住んでいた人たちは、収容所からの帰還が許された後、しかたなく基地の周囲で暮らしはじめ、それぞれ集落（字）ごとに郷友会を組織した。普天間基地の北側にある新城の集落の戦前の様子は、ジオラマに再現して市の博物館に展示してある。字宜野湾の郷友会でも基地に奪われる前の様子をジオラマで再現しようという取り組みを始めている。

アパートで朝食を済ませ、十分あまり歩いて大学に行き、夕方また歩いて帰るのが日課となった。朝は七時すぎから小型ジェット機の離陸する音が聞こえはじめ、夜は九時すぎまで航空機が飛び交い、日米合意で定められた午後十時を過ぎてからもしばしば飛行する音が聞こえる。沖国大では日曜日でも研究室や図書館が使えるため、曜日に関係なく自分の研究の都合で大学に行き、逆に平日でも必要に応じて休息をとる、そんな生活がはじまった。

車社会・沖縄

宜野湾で暮らすことになって、まず考えなければならなかったことは、車を持つか持たないかである。沖縄はかなり重症の車社会である。街には自動車があふれ、オートバイはいくらも見かけるものの、自転車はいたって少ない。まれに高校生が自転車で通学している姿に出くわすことがあるが、勤め人や主婦が通勤や買い物に自転車を使うことはほとんどない。暑いことと坂が多いことが、自転車の少ない第一の理由だろう。さらには、鉄道がないため、駅まで自転車で行くという本土では当たり前前の行動は沖縄では成立せず、よけいに自動車に頼ることになったのだろうが、それだけでは説明がつかないように思う。それを裏付けるように、県内の一部の自治体では、小学生に徒歩通学を呼びかけていた。裏返せば、歩いて通えるにもかかわらず、親の車で通学する児童が多いことを意味している。愛知県の田舎町で育ち、東京と千葉で暮らしてきた私には考えられないことである。

「百メートル先のコンビニエンス・ストアにも車で行くのが沖縄人だ」と地元の人が自嘲的に言うほどの重症である。その必然の結果といたら言いすぎだろうか、沖縄県はかつての長寿県の座からすべり落ちた。男性の平均寿命はすでに十年以上前から全国平均並みになっていたが、ついに女性まで全国一の座を明け渡すこ

ととなってしまった。それどころか、今や肥満率日本一の不名誉まで背負っている。

こういう土地で暮らすのだから、車がないと不便であることはいうまでもない。沖縄の知人は、当然のように私が車を持つものと思っていた。無事故・無違反に無運転までが加わる筋金入りの優良ドライバーの私は迷った。知人のなかには車がなくても大丈夫という人もいたが、そう言うのは例外なく本土出身者だった。

必要なときにはレンタカーを借りることにして、車は持たないことに決めた。しばらく迷いながら車なしで暮らした末の結論である。理由のひとつは、車社会・沖縄への反発である。どう見ても、沖縄の車依存は過度といえる。「百メートル先……」には誇張が含まれているとしても、沖国大の学生が、キャンパス内の駐車場に車を入れるために、路上に停車して駐車場が空くのを待っている姿を見ているうちに、不満がつつたからである。ほんのすこし離れたところに別の学生用駐車場があり、そちらには空きスペースが十分あり、そこからキャンパスまで歩いて五分とかからないにもかかわらず、そちらに停めようとはしない。車のなかでスマートフォンをいじりながら、もつとも校舎に近い駐車場の空きを待つ学生の姿を見ているうちに、沖縄の車依存ぶりに疑問を覚えた。そうした学生のなかには、車がなくても通える学生も少なからずいるにちがいない。車での通学が便利なことにはわかる。しかし、便利と必要はちがう。車を持てる（買える）から、その便利さゆえに車で通うその姿が、海兵隊の沖縄駐留と重なって見えてきた。

海兵隊は、ほんとうに必要かどうかの検討がなされることのないまま、沖縄への駐留をつづけている。海兵隊は沖縄が便利だから駐留しているのであって、日本の防衛にとって必要不可欠だからではない（海兵隊の沖縄駐留については、拙稿「海兵隊沖縄駐留論の再検討」『流通経済大学論集』第三四巻第四号、二〇〇〇年三月、参照）。海兵隊は日本に駐留し続けたい（戦利品を手放したくない）と思えば、日本政府は、沖縄なら何とかなるからという理由で、沖縄への駐留を認めている。つまり、海兵隊にとって便利だから日本に駐留し、必要

かどうかわからないが、沖繩なら何とかなるから駐留させているのである。

学生は車で通うことが便利だから、道路が渋滞したり、駐車場の空きを待たなければならなかったりといった不便があっても、それでも何とかなるから、車で通学している。こういう学生の姿が、何だか日本政府の沖繩に対する態度と同じように思えてきた。日本政府は、沖繩には反発もあるが何とかなる（と思っている）から、海兵隊を沖繩に駐留させているのである。だから、沖繩に海兵隊の撤退を求める資格はない、などと乱暴なことをいうつもりはないが、沖繩の側にも自省すべき点があるような気がしてきた。

ついでにいえば、長寿社会の崩壊とも関係があるだろう。沖繩は一面ではジャンクフード王国である。宜野湾で暮らしはじめてまもなく、地元で料理店を経営するある女性から「M（大手ハンバーガーチェーン）のひとりあたり消費量は沖繩が日本で一番」と聞いた。別のある人は「K（大手フライドチキンチェーン）のひとりあたり消費量が全国一」といつていた。どちらが本当なのか、それとも、どちらも事実なのか。確かめる統計を私は持ち合わせていないが、何人かの地元の人から同じような話を聞いた。しばらく暮らしているうちに、どうも根拠のない話ではないという確信をいだくようになった。もともと信頼できそうな話は、Kはひとりあたりの消費量が全国一であり、Mのほうは一店舗あたりの売り上げが全国一ということのようである。

もうひとつついでにいえば、肥満に一役買っているのが、地元の人が「ポーク」と呼ぶポーク・ランチョン・ミートである。デンマーク製もあるが、その名も「スバム」という銘柄のアメリカ製品がある。かのスバム・メールの語源はこれである。アメリカ占領下の輸入依存経済がもたらしたもののひとつである。車依存とジャンクフードの組み合わせが何をもたらすか、その行く末は見えている。

車だけでなく、テレビも持たないことにしたため、ラジオを聴くことが多かったが、「取り戻そう、長寿社

会・沖繩」というスローガンを県がラジオでさかんに広報していた。また、沖繩県は、飲酒運転の防止にもやつきになっていく。飲酒運転による人口あたり交通事故率は二十年以上も連続で全国一という不名誉ぶりである。たしかに、ラジオや新聞でも、飲酒運転による交通事故のニュースは多かった。アメリカ兵による飲酒運転や交通事故も多かったが、琉球大学の学生のなんと一割が飲酒運転の経験があるという調査結果も発表された。肥満率の高さだけでなく、肝疾患の率も全国一らしいが、酒も一役買っているにちがいない。

話が基地問題から大きくそれた。だが、沖繩社会が抱えるこうした問題は、基地とも無関係ではない。鉄道が整備されず、車社会になった原因のひとつは、やはり米軍基地である。主要な道路は基地と基地とを結ぶものとして整備された。なかにはその名も「パイプライン通り」がある。かつて那覇軍港から基地まで燃料を運ぶ油送管が敷かれていたところである。戦後の沖繩はすべてが米軍のために、米軍の都合でつくられた。車社会もその帰結のひとつである。

さて、車を持たない私は、当然ながら移動には徒歩、バス、タクシー、そしてモノレールを利用することになり、さらには他人の車に乗せてもらうことになった。こうした移動は悪いことではなかった。歩くことは健康によいほか、公共交通手段はその社会を見る窓でもある。車の氾濫がひきおこす渋滞が路線バスを遅らせる様子もわかり、タクシー運転手との会話は情報収集源としても有益であった。同僚や友人の車も同じである。移動のあいだの会話は楽しいだけでなく、いろいろなことを教わる勉強の時間にもなった。知人によけいな手間をとらせたことにはいささか負い目を感じるが、江戸の仇を長崎で討つただから、車の恩は別の何かで返せばいいだろう。

(三) 基地・普天間

普天間の航空機

普天間にはヘリコプターを中心とした航空部隊が配備されている。オスプレイと交替して退役したCH-46「シーナイト」という中型輸送ヘリ、ほぼ同じ時期に開発されたCH-53「シースタリオン」大型輸送ヘリのほか、攻撃ヘリのAH-1「コブラ」もある。固定翼機としては空中給油機KC-130というプロペラ機や連絡用の小型ジェット機などが配属されている。また、これら常時配備されている航空機のほかに、海軍の哨戒機P-3Cがしばしば訓練のためにやってくる。後で述べるが、航空機の種類によって騒音や振動にはかなり大きな違いがある。固定翼機と回転翼機（ヘリコプター）の違いのほか固定翼機でもジェット機とプロペラ機では騒音は桁違いである。

配備をめぐって激しい反対運動を巻き起こしたオスプレイであるが、これはティルト・ローター機といって、ヘリコプターのようにも飛べるし、ローター（プロペラ）の向きを変えて固定翼機のようにも飛べる。ただしローターが長すぎて、固定翼機のような離着陸はできず、そのためもあって垂直離着陸機と呼ばれている。つまり、ヘリコプターのように離着陸を行い、空中でローターの角度を次第にかえて固定翼機のように飛行する。実際に離陸の様子を見ると、まったく滑走せずにヘリコプターのように垂直に離陸することもあるが、ローターを少し斜めにかたむけて数秒ないし十秒ほど滑走してから離陸することもあった。

固定翼機と回転翼機を組み合わせたというこの発想自体は、かなり以前からあったもので、半世紀も前から航空機メーカーは開発に取り組んできたが、なかなか実用にはいたらなかった。実用化されたのはオスプレイがはじめてで、もちろん日本では普天間にしか配備されていない。

一九八〇年代から開発が始まったものの、当初は事故が多発し、多数の死者を出した。また、ヘリには必ず

つけなければならぬとされているオート・ローテーションという安全のための仕組みがオスプレイにはついていない。はじめはつけようとしたが、技術的に不可能だったため、開発途中でこの機能はなくてもいいことにした。

そうしたこともあって、安全性に疑問符がつけられたままの配備となった。これものちにくわしく述べるが、アメリカの専門家のあいだでも安全性に対する疑問は残ったままである。ヘリコプターの良いところと固定翼機の良いところをあわせ持つというふれこみだが、長所だけをあわせ持つなどという都合のいい話があるだろうか。もしかしたら短所もあわせて抱えこんではいけないだろうか。もし、そうだとすると「帯に短し、たすきに長し」になってしまふ可能性もないとはいえないだろう。

普天間の滑走路は、南西から北東の方向にのびているのだが、航空機は通常、風上に向かって離陸する。航空母艦であれば、航空機が発艦する際にはその方向に艦首を向けることもできるが、地上では当然そうすることとできないので、風向きにあわせて離着陸の方向を決めることになる。普天間飛行場には滑走路のわきに吹き流しがあるが、私がいた間は、たいてい北から南に向かって風が吹いていた。そのため、南から北に向かって離陸し、着陸するときも南方向から進入することが多かった。つまり、アパートにいるときは、わたしの目の前を通って着陸した。地元の人に聞いてみると、どうもおおむね日本の年度でいう上半期と下半期で風の向きが変わり、それにあわせて離着陸の方向も決まるようであった。もちろん、日によって風向きが反対になることもあり、そういう日は北から南に向かって滑走・離陸した。

(四) 神話のなかの沖繩

沖繩の基地問題について、本土にいてはわからないことが少なからずある。沖繩のことがうまく伝わらなかつたり、誤解があつたり、沖繩と本土の間には、地理的だけでなく距離がある。そうした距離を縮め、誤解を解かなければ、問題が解決に向かうことはないだろう。では、普天間問題を解決するために、何を知らなければならぬか、そして、何をしなければならぬか。それを考えるために普天間で暮らした。

普天間をはじめとする沖繩の基地問題を考えるうえで、解くべき問題を私なりに整理してみると、次の四つになる。間違つた知識や印象で語られることの多い沖繩の基地問題に関する「神話」なのかもしれないし、実話なのかもしれない。「神話」ならば事実と論理によつて、その呪縛を解いて実話に置き換えていくことが必要である。

- 1 何もないところに基地をつくつたら、カネ目当てに人が集まつてきた
- 2 海兵隊の沖繩駐留は、日本の防衛のために、また抑止力としても不可欠である
- 3 沖繩の経済は、基地に依存している
- 4 沖繩の本音は、基地よりもカネである

1は歴史的事実の問題であつて、検証するのは容易である。2については十年余り前に私なりの答えを出しており、アフガンスタン戦争やイラク戦争など、その後の経緯を経ても私の見解は変わらない。3の経済の問題は私の専門ではないが、専門家の見解は概ね一致しているようである。最も難しいのは4である。これは政治的な意思の問題であると同時に意志の問題でもあるからだ。しばしば民意が論じられるが、民意とは何だろ

うか。何で表されるものであり、何をもって測ることができるのか。

沖縄に発つ前のこと、私が普天間で暮らすというと、かつての教え子がこう言った。「どうして普天間第二小学校はあんなところにあるんですか。なぜ、あのように危険なところに小学校をつくったのか、移転させないのか。これをぜひ調べてきてください」。

学生時代にはそれほど勉強熱心でなかったわりには、普天間第二小を知っているだけでもほめてやりたいと思った。この小学校は、普天間問題を象徴するものとして、メディアにしばしばとりあげられる。ついではななんだが、この問いにも答えなければならないと思った。

二 基地と市民生活

(一) 暮らしのなかの普天間基地

騒音と振動

普天間で暮らす上でまず気になったのは当然、騒音である。何しろ、アパートは基地のすぐそばである。航空機の発着の多い昼間はたいてい大学に行っているとはいえ、朝夕は騒音に悩まされることになるのだろうか。もっとも、それを体験するためにわざわざ基地に近いく所に部屋を借りたのだから、それも覚悟の上のことではあったが。

私が滞在した九月から三月は、先に述べたように、風向きの関係で滑走路の南側から北に向かって離陸するのが常であった。したがって滑走路の一番南、つまり、私の目の前から滑走を始めた。着陸の場合は南の嘉数

方面から進入してくる様子がよく見えた。主な航空機の騒音についてのべておこう。

普天間に配備されている航空機のうち、毎朝のように、午前七時すぎには、小型ジェット機が離陸する。小型とはいえ、ジェット機の離陸は大きな騒音を出す。耐えがたいというほどではないが、不快であることは言うまでもない。

ジェット機に比べると、プロペラ機の騒音は小さい。四発のプロペラを持つ空中給油機KC-130は、駐機場から滑走路に向かうとき、そして、離陸態勢に入りエンジンの回転数を上げると、音も大きくなるが、滑走を始めるとまもなく静かになり、ほとんど気にならなくなるほどになる。逆に着陸するときは、近づいてきたことはわかるが、騒音としては、さほど気にはならない。機体の大きさのわりには、KC-130は騒音としてはたいしたことはない。

周囲は住宅地であり、アパートの前の県道は車が頻繁に行き交う。車の種類や加速などの具合によっては、プロペラ機やヘリコプターの離陸とそれほど変わらない程度の騒音となるが、車に比べると、ジェット機の騒音はやはりかなり大きい。ただし、街を歩いているときに着陸のために高度を下げて進入して来る際には、頭のすぐ上を通るように感じて、不安な気持ちにおそわれる。このKC-130は、山口県の海兵隊岩国基地に移転することになっている。

CH-46はタンデムローターといって前後に二つの大きなローターをもつヘリであるが、オスプレイと入れ替わりに、普天間では二〇一三年九月に退役した。CH-53より機体が小さい分エンジン音も小さかったが、それでも頭上を飛ぶときには音というより振動は不快感をもよおした。

普天間でもっとも頻繁に飛び、そのために不快さをまき散らしているとわたしが感じたのが、AH-1である。二人乗りの小型の攻撃ヘリで、日本の陸上自衛隊も保有している。機関砲のほか対戦車ミサイルを搭載し

ており、ベトナム戦争や湾岸戦争などに投入された。なぜ、これが不快かというと、小型であるため騒音そのものはそれほど大きくないのだが、狭い範囲を旋回する訓練を繰り返すので、五分とおかずに頭上近くを飛ぶことになる。しかも、二機が同時に旋回訓練を行うこともあるので、その場合はなおうるさい。ローターが回転するバタバタという音のほか、ヒュンヒュンという音も不快感をあおっている。

ヘリコプターは騒音もさることながら、むしろ振動のほうが不快である。大型のCH-53の振動が引き起こす不快感に慣れるということはなかった。地元の人の話では、乳児を抱えた家庭や心臓にペースメーカーを入れたり補聴器を使ったりしている人など、いわゆる弱者の心身への負担は、健康な人よりもさらに大きいものだという。普天間の航空機が原因と考えられる健康被害も報告されている。

普天間所属の航空機以外にも、米海軍のP-3C哨戒機「オライオン」がしばしば訓練のために普天間にやって来る。その時はたいていタッチ・アンド・ゴーと呼ばれる訓練を行うが、これがやつかいである。離陸して旋回したのち着陸態勢に入り、滑走路に着地したかと思うとすぐにまた離陸する。そして旋回してはまたタッチ・アンド・ゴーを繰り返す。数分おきに離着陸をくりかえすことになるので、かなりうるさい。

ときおりFA-18「ホーネット」などのジェット戦闘（攻撃）機が普天間にやって来ることがあるが、その騒音たるやすさまじく、まさしく耐えたいほどである。私が普天間で暮らした半年の間に一度だけ、米空軍の最新鋭戦闘機F-22「ラプター」に遭遇した。米本土から嘉手納基地に来ていたのが、滑走路上で何がしかのトラブルがあったらしく、臨時に普天間にやって来た。その轟音はFA-18にまさるとも劣らないものであった。新鋭機だからといって騒音対策などは何もしないのだということを実感した。軍用機はただひたすらその目的、すなわち戦闘するためだけに設計されているというわけだ。

オスプレイ

問題のオスプレイはどうか。これも不快な振動をまき散らしている。二〇一二年の配備前に日米政府間で取り決めた合意によれば、ヘリコプター・モードで市街地上空を飛ぶことはしないはずのだが、普天間に暮らし始めてすぐに、この合意に反する飛行を目撃した。他の航空機と同じく、南から、つまり嘉数方面からヘリモードで飛来し、基地に着陸した。その際の騒音と振動は、かなり不快である。耳よりもむしろ胸から腹のあたりにかけて不快な圧力を感じる。私がいた半年間で、のべ百回を超えるオスプレイの飛行を目撃したが、その大半は市街地上空をヘリモードないしヘリモードに近い角度の転換モードで飛んでいた。

オスプレイは十二機ずつふたつの部隊が配備された。垂直尾翼に「竜」の文字が描かれている部隊が二〇一二年十月に配備され、つづいて翌一三年八月から虎の顔のイラストが尾翼に描かれた十二機が配備された。竜の部隊は基地の南側、つまり、沖国大に近いところに駐機しており、虎のほうは市役所に近い側、つまり北側を駐機場所としている。

離陸の際にさほど大きな音をあげることはないが、離陸態勢に入るまでがうるさい。オスプレイの構造からくるのだが、ローターが巻き起こす風とエンジンの排気が下に向かうからだろう、かなり大きな騒音と振動をまき散らしながら、駐機場から滑走路に向かうことになる。しかし、車輪が地面を離れると、とたんに音は小さくなる。

「良き隣人」

沖繩に来て一か月が過ぎた頃、ちょうどオスプレイも追加配備の十二機を加えて二十四機態勢になった。旧知の『沖繩タイムス』記者が私のところにやって来て、インタビューを受けた。

私が話したことは次のような記事になった。「オスプレイについて」私は欠陥機という言い方をしないが、海兵隊は未完成の部分が多いまま膨大な予算を使い遅れに遅れていた配備計画に間に合わせるために見切り発車した」という私の見方に加えて、「確かに市街地上空をヘリモードか、ほぼヘリモードで飛んでいる」ことを私が自分の目で確認していることが紹介された。普通のプロペラ機のような固定翼モードからローターの角度を変えてヘリモードに変換して着陸するのだが、基地のかなり手前からすでにほとんどヘリモードに見えるほどエンジン部分を垂直近くに行っているのが常であった。ヘリモードに近いかたちで飛来すると、固定翼モードの数倍の騒音と振動に感じられ、また、速度が遅いためにその時間が長くなる。不快この上ない。そこで私が話したことは、「比較的長く固定翼モードで飛んで転換し、(周囲に住宅地の少ない)飛行場奥の少し手前で着陸すれば少なくとも(南側の)大謝名周辺では騒音は減る。米軍が本気で負担を減らそうと思うのであれば、住民がぎりぎり騒音を小さく感じる飛行ルートを政府や自治体と話し合い、設定すべきだ。今、それが十分にやられているとは思えない」として記事になった(『沖繩タイムス』二〇一三年十月二十五日)。

また、宜野湾に来て一カ月余りが過ぎたばかりで、誤解や認識不足もあっただろうが、当時の率直な気持ちである。また、地元のメディアはオスプレイを「欠陥機」と呼ぶが、それは正確でないばかりか、取り組むべき問題の核心から外れてしまうおそれがあり、私は賛成しかねる。

さて、オスプレイが着陸に際して早くからヘリモードに変換すると、騒音や振動が大きくなり、またその時間も長くなる。反対に、固定翼モードで飛来し、基地に入ってから変換すれば、騒音や振動はほとんど気にならないほどである。それぐらい、飛行モードによる違いは大きい。小型のプロペラ機の騒音は、ほとんど気にならない程度だからだ。

しかし、半年余りに及ぶ私の宜野湾滞在中、固定翼モードで飛来して着陸したのを目撃したのは、わずかに二度だけであり、あとの九十二回は早くからヘリモードへの転換をしての着陸であった。

なお、夜間の飛行については取り決めがある。一九九六年の日米合同委員会で合意された騒音防止協定では、午後十時から午前六時までの夜間早朝は飛行が禁止されている。しかし、これもほとんど有名無実と化していると言いたいほどだ。

騒音は離着陸時ばかりではない。離陸前や着陸後に駐機場でローターを回転させている間は、エンジン音とローターの騒音・振動が周辺の住宅地域に響き渡る。大学に行く途中にも駐機場からそう離れていないところを通るし、大学で基地の騒音・振動が気になることも少なくない。当然、帰りが遅くなったときなど、周囲が静かになっていたので、よけいに気になるものである。

また、道を歩いているときは、音や振動はまわりの建物に反射するので、どちらの方向から聞こえているのか、わからなくなることがある。ということとは、住民にとっては、単純に基地からの距離と騒音の大きさが比例するとはかぎらないのだろう。私の場合もアパートの部屋にいるとき、廊下に出たとき、ベランダに出たときでかなり違いがあるものだと感じた。また、玄関のドアをロックするかどうかでも振動がかなり違うこともあった。

深夜までエンジンの音が響くこともしばしばあり、米軍は地元で暮らす住民のことを考えているとは思えない。米軍は定期的にイベントなどを開いて「良き隣人」を演出する。そうしたイベントや広報活動を知って、「米軍は良き隣人たろう」としている。それなのに沖縄の人たちは米軍の批判ばかりしていて、けしからんと言った知人がいる。この知人は大学の教員であり、専門は安全保障政策である。地元との交流イベントなどを否定するつもりはないが、それよりも、日ごろ近隣にふりまいていては迷惑を減らす工夫をまず優先すべきでは

ないのか。オスプレイ以外でも、深夜の飛行があった場合には、そのつど地元の新聞は、小さくはあっても翌朝の紙面に記事を載せていた。

(二) 基地と大学

事件としてのヘリ墜落

沖国大といえ、十年前の二〇〇四年八月に普天間基地所属のヘリコプターがキャンパス内に墜落したところである。そのときは海外にいて当時のことをくわしく知らない私は、大学図書館内にある「米軍ヘリ墜落事件関係資料室」に行ってみた。この資料室の名称からもわかるように、大学の認識としては、あれは事故ではなく事件なのである。

二〇〇四年八月十三日午後二時過ぎ、普天間飛行場に配備されている海兵隊のCH-53が大学の本館ビルに激突し、炎上した。この事故で三人の乗務員が重軽傷を負ったものの、それ以外の死傷者は出なかった。これは奇跡に近いことである。なぜならば、夏休み中とはいえ、大学には集中講義などで来ていた学生や教職員がいたし、大学の周辺には住宅のほか、病院や保育所、商店、さらにはガソリンスタンドなどが立ち並んでいる。墜落の直前には住宅密集地に大小の各種部品を落下させているし、墜落時にはヘリのローター（プロペラ）が住宅地にまで飛んでいっただけでなく、建物のコンクリートの破片などが近くの住宅の窓から飛びこんだほどだった。

激突した大学本館のなかにも執務中の職員が多数いた。そのひとりに話を聞いてみた。本館一階にいたその職員は、ヘリが近づく音には特に気づかなかったという。いきなり地震のような揺れを感じ、ドーンと何かがぶつかったように感じると同時に、爆風が窓ガラスを破って事務室に飛びこんできた。爆風だけでなく、ヘリ

の機体の一部が飛びこんできた。その場所はいつもなら事務職員が仕事をしている席だった。その日はたまたま出張で不在だったために、難を逃れることができた。いつものようにその席で仕事をしていたら、命にかかわる怪我を負った可能性が高い。まさに幸運以外のなにもものでもない。ほかの職員にしても、そのあたりに行くことはよくあり、誰も怪我をしなかったのは、やはり幸運だったのである。当時の町村信孝外相は、パイロットの腕が良かったからなどと、なんとも的外れな発言をしたが、外相という立場にもかかわらず、まるで他人事のようなことを言うところに、日本政府の姿勢がよく表れている。

墜落後、学生や職員は建物から外へ非難した。まもなく二、三十人の米兵がかけつけ、黄色のテープで現場を封鎖した。事件を知って記者やカメラマンもかけつけたが、米兵は撮影の妨害をしたばかりか、撮影したカメラをとりあげようとし、もみあいになった。その場に居合わせて写真を撮影した学生のカメラを奪うために米兵が追いかけてまわしたりもした。機体だけでなく、周辺の土までも米軍は許可なく持ち去った。このように大学は米軍に「占領」され、警察さえも立ち入ることができなかった。だからこれは、やはり事件なのである。

沖国大の取り組み

図書館の一角に設けられた資料室は、事故から三年あまりを経た二〇〇八年一月に開設されたもので、当時の写真や新聞記事、関連書籍、ビデオなどのほか、目撃証言をもとに作製した模型まで展示してある。模型には、迷走し旋回しながら墜落したヘリの軌跡まで再現してあった。

資料室開設ためのプロジェクト会議のチーフだった照屋寛之・同大法学部教授は「墜落事件の記憶も時間と共に消えていつている。墜落事件後皆が叫んだ思いとは裏腹に無くなければならない基地はそのまま、なくしてはならない事件の記憶は薄れている」と感じ、資料を収集、展示する場をここにつくることで、「基地を

抱える沖縄の共有財産にしたい」という思いを抱いて設置にこぎつけた（沖縄国際大学図書館報『でいご』第四二号、二〇〇八年）。

事件から五年後には「衝撃と惨状―写真・映像展―」を図書館で開催している。その後も資料の収集をすすめ、それらの展示やアンケート調査などをおこなっている。また、地元の画家がこの事件をモチーフに描いた「黒い壁」という作品や現場から採取したがれきなども展示している。

大学の正門横には、墜落に伴う火災で焼け焦げたアカギの木が残っている。いや、残してある。その一角は、キャンパスの外の一般道からいつでも入れるように仕切りがなされており、通りすがりの人でも誰でも立ち入ることができる。わたしが普天間で暮らしはじめたころには、まるで墜落現場を指差すようなかたちで立っていたそのアカギは、十月に沖縄をおそった三つの台風のと、先端から次第に朽ちてきた。

沖国大の学生

学生や教員に聞いてみると、騒音で授業が聞き取りにくいことや、ときには中断せざるをえないこともあるという。校舎によってもちがう。私の研究室は基地からすこし離れており、また、基地とのあいだに大きな建物があることや、部屋が一階であることも関係があるのだろうが、仕事に差し障りがあると感じるほどの騒音ではなかった。また、図書館にいる時も同じく、仕事の邪魔になるほどではなかった。

沖国大の学生に話を聞いてみた。法学部の学生は大半が沖縄出身者で占められている。一年生から四年生まで、合わせて五十人ほどではあるが、沖縄の一面を知ることができたように思う。

まず、全体的に基地問題に関心が高いとはいえないという印象を受けた。地元・宜野湾の出身者を除いて、ほとんどの学生が普天間第二小学校を知らなかった。テレビなどで普天間問題を取り上げる際に必ずといって

いいほど出てくるのが、滑走路のすぐ先にあるこの普天間第二小であるが、それを知らないことに私はいささか驚いた。もちろんこの学校だけが危険なわけではないのだから、特別扱いする必要はないという理屈もありえよう。だが、マスメディアが普天間問題を取り上げる際に象徴のようになってこの学校を知らないということは、何かを示しているのではなからうか。

そこで、別の質問を試してみた。自分が住んでいるところから一番近い基地はどこか。そこが何の基地か知っているかを尋ねてみた。もちろん、本土出身の学生以外にも、沖縄本島の南部や北部、あるいは離島など、基地とほとんど無関係な地域から来ている学生もいたが、そうした学生を除いても、自分の暮らしと基地との関係にほとんど無頓着のようだった。生まれた時から基地はあり、生活風景の一部になっているから、あまり気にしたことはない、という学生が多かった。

いわゆる「平和教育」についてもたずねてみた。沖縄では悲惨な沖縄戦について語り継ぐ運動が盛んに行われおり、学校でもそうした題材を活用していると聞いていたからである。沖縄出身の学生は全員、小中学校で沖縄戦について「平和教育」を受けていた。ほとんどの学生は、戦争体験者の話を聞いたことがあり、それを劇にして演じたという学生もいた。ただし、こうした「平和学習」は小中学校が中心で、高校ではあまり行われていないということもあって、戦後の基地問題にまではたどりつかないのだろう。

「平和の礎」にはほぼ全員が行っていた。これは戦争終結から五十年になる一九九五年に建立された記念碑で、沖縄本島南部の糸満市と八重瀬町にまたがる沖縄平和祈念公園の一角にある。国籍や軍人・民間人の区別をすることなく、沖縄戦の戦没者の氏名を刻んでいる。建立後も犠牲者の氏名を追加しており、その数は二十四万人を超えている。この公園には、沖縄県平和祈念資料館や沖縄平和祈念堂などの施設もあるが、学生にはこの「平和の礎」が強く印象に残っているようだった。本土からの修学旅行生も大半が「平和の礎」を訪

れるようだが、冲国大の学生たちの場合もやはり学校行事の一環で行ったとのことである。何度も映画化され、多数の非戦闘員が犠牲となった沖繩戦を象徴する「ひめゆり部隊」の慰霊碑「ひめゆりの塔」と並んで、今や「平和の礎」は修学旅行の『定番』となった感がある。

沖繩戦については学校で学んだが、戦後の米軍基地についてはあまり知らないというのが、沖繩の学生の多数を占めているようだ。冲国大では、基地についての講義もあり、地元市役所で基地対策に取り組む職員を講師に招くなどの努力もしている。それまでは関心がなかったが、冲国大に来てから基地について学び始めたという学生も少なくないことをつけ加えておきたい。

(三) 宜野湾市役所

清明祭

普天間基地内に墓がいくつもあるが、そのなかには大きな亀甲墓という沖繩独特の墓も多い。本土のように仏教の根づかなかった沖繩では、独特の祖先崇拜が信仰の中心を占めている。健康や子孫繁栄、果ては商売繁盛まで祖先の守護があるという信仰のあり方は、日本とも中国とも異なっており、沖繩で独自に発展したものらしい(比嘉政夫『沖繩の親族・信仰・祭祀——社会人類学の視座から』榕樹書林、二〇一〇年、名嘉真宜勝『沖繩の人生儀礼と墓』、沖繩文化社、一九九九年)。

そのような祖先崇拜の篤い沖繩の人たちが墓をないがしろにするはずがない。聞いてみると、清明祭のときなどは基地内に入ることが許されるのだという。清明とは、二十四節気のひとつであり、新暦では四月の上旬になる。この日は親族がそろって墓参りをする事になっており、この清明祭は沖繩の人びとにとってはたいせつな行事である。清明祭の写真を見ると、おおぜいでごちそうを持ち寄って、まるでピクニックのような感

じだ。たとえていえば、墓参と花見がいつしよになったようなものといったところだろうか。その大切な日に基地内にある墓へ行くには手続きが必要なのだと聞いて、市役所を訪ねてみた。

宜野湾市役所の基地渉外課がこれを担当している。まず、市内に二十三ある自治会長が集まってその年の清明祭の日取りを決める。市ではその報告を受けて申請用紙を自治会に配布する。清明祭のために基地内への立ち入りを希望する人の必要事項を記載した名簿を自治会単位で作成し、基地渉外課に提出する。市では米軍提出用に文書を作成しなおして基地に提出する。立ち入りを許可する権限は米軍側にあるが、認められないことはないという。この申請をするのは例年、五百人ないし六百人程度だということである。申請していない人は立ち入れないので、予定者は必ず名簿に載せておくが、その日の天候や個人的な都合により、実際に基地内に立ち入るのはこれよりも少ない。市では実数までは把握していない。このように自治会単位で入域希望者を取りまとめているが、市外に住んでいる人は当然、自治会に入っていないので、そういう人は直接、市が申請を受け付ける。

清明祭とは別に、墓参や墓の掃除などで基地内への立ち入りを希望する人もいる。墓以外にも^{うがんじよ}拝所があり、そこへ行きたいという人もいる。そうした人たちの申請が年に五十件ほどある。一件あたりひとりから二十人ほどだというのが、例年、こうした申請をする人はほぼ決まっているという。

立ち入り調査

清明祭や墓参などのために市民が立ち入ることは手続きさえとれば認められることが多いが、市ではそれ以外でも立ち入ることがある。それは主に遺跡などの文化財の調査のためである。市教育委員会ではこのような調査を精力的におこなっており、ほかの自治体と同様に報告書も作成している。もっとも文化財調査のため

も、滑走路に立ち入ることはできず、限られた範囲の調査にとどまっている。また、市では、返還後の跡地利用計画の策定を進めており、そのためには、地下の水脈なども握っておかなければならないが、そうした調査のための立ち入りは米軍が認めない。これが跡地利用の計画づくりに支障となっているとのことだ。

ところで、市役所の片隅に、ジオラマが置いてあるのを見つけた。普天間基地返還後の跡地利用計画であるが、これは地権者の意見を取り入れることなく、市が独自に作成した計画のため、採用されなかったということである。宜野湾市では二〇〇一年から本格的に跡地利用の計画づくりを始めた。地権者（地主）は今や三千人以上もいる。その人たちの意向を抜きには跡地利用計画の策定は進まない。

ちなみに、現在の市庁舎は、もともとは基地に接収され、のちに返還された土地に立っている。基地の北側にある野嵩ゲートからほど近い場所にある。このあたりには市役所だけでなく、文化会館や水道局、消防署など、宜野湾市の主な施設が並んでいる。市役所の屋上からは基地がよく見えるようだが、残念ながら、屋上に上がる機会はなかった。

宜野湾で暮らして一か月ほどしたところに『沖縄タイムス』紙のインタビューを受けたとのべたが、その紙面に使われた写真は、市役所から歩いて二十分ほどのところにある民家の屋上で撮ったものである。沖縄では三階建ての民家もめずらしくないが、このの屋上からは基地がよく見える。オスプレイの配備からしばらくのあいだ、『沖縄タイムス』の記者が交代でここに詰めてオスプレイの離着陸と飛行の様子を取材（というより監視・記録）していた場所である。旧知の記者にここに連れてきてもらったのだが、基地全体があまりによく見渡せるので、思わず「絶景だね」と口にする。「これを絶景と呼ぶのか」とにらまれてしまった。取材に訪れる記者らのために、開放してくれているのだという。基地がよく見える場所を何箇所か見つけたが、私の知るかぎり、ここが最高の場所だろう。

もうひとつ、基地の反対側、つまり、私のアパートのある基地の南側にも、基地のよく見える場所がある。こちらにも民家の屋上であるが、屋上にある水のタンクのそのまた上に設置された取材場所である。かつて水不足に悩まされた沖繩では、アパートなどの集合住宅だけでなく、一戸建ての個人住宅でも屋上にタンクを設置しているのをよく目にするが、このお宅もそうしていた。そこが屋上なのだが、さらにその上に、火の見やぐらのようなものが設置されている。これは取材に訪れる記者のために、家主が自ら費用を負担してわざわざ設置してくれたのだという。私が本土から来た知人のジャーナリストを連れて行ったときも、こころよく上がらせてくれた。感謝と敬意を込めて記しておく。

『宜野湾市と基地』

普天間爆音訴訟の原告団長をしている島田善次によると、あまりの騒音に耐えかねて市役所に行ったとき、「基地はカネのなる木」だといわれたという。そのときどきの市長によって対応も異なるのだろうが、一九八四年に市は『宜野湾市と基地』という報告書を発表した。当時の安次富盛信市長はその報告書で次のように言っている（宜野湾市企画調整部企画課編『宜野湾市と基地』、一九八四年）。

基地から生じる諸問題は、市民生活に大きな影響を及ぼしており、市民の安全でより良い生活環境の確保のため、国や県・米軍に十分な対策を求めるとともに市議会、市民及び関係機関と連携して対処していく所存であります。

当時すでにこのように問題として認識されていた。市では企画調整部の企画課に基地対策係が置かれており、

基地問題を担当していた。報告書は、「近年、普天間飛行場の移設については市をはじめ、県においても強く取り上げられ、県政の大きな課題に発展しており、同基地の移設は、国・県の責任において解決するよう強く要請して」きたという一方、基地を「広大な開発余力を残した地域」ととらえ、「移設問題については、市民の意見を積極的にすいあげ、併せて軍用地主の利益を守り、優先する立場からその合意を図って」いくとしている。

また、「市の中央部に位置し滑走路が住民地域である東西に延びた飛行場で一日に数十回という離発着及び住民地域上空での旋回飛行訓練を行っている状況」を憂慮している。その背景には、沖縄各地でおきている航空機の墜落などの事故がある。この報告書が出される二年前の一九八二年八月には、UH-1ヘリコプターが普天間第二小学校からわずか二百メートルあまりのところ墜落している。市はこれに強く抗議をし、事故原因の調査の公表、住宅区域上空での飛行中止、午後八時以降のエンジン調整及び飛行の中止を求めた。このほかにも事故はおきており、復帰後だけで二十三件もの普天間基地に関係する事故が報告書に記載されている。

騒音についても、「常駐している米軍ヘリコプター及びその他の航空機又は、他の米軍基地から飛来するジェット機、プロペラ機による騒音」を取り上げ、「昼夜の別なく大型航空機の離着訓練、ヘリコプターの市街地上空の旋回訓練をはじめ、夜間のエンジン調整によるもの」など、今日とかわらない様子が記されている。騒音測定の結果もデータとともに、くわしく記述されている。

基地で働く従業員数の推移をみると、普天間では、復帰の年の一九七二年の三百七十三人から一九八三年の百七十人まで、ほぼ一貫して減少傾向にあることがわかる。

ちなみに、普天間飛行場の地主は、一九七八年十月現在で、市内に千五百八十三人、市外に百十五人のあわせて千六百九十八人であり、地代は十七億八千四百万円余りであった。なお、地主会は一九五二年六月に結成

されている。

市は基地の返還を求めていたが、普天間の土地もさみだれ式に少しずつではあるが返還された。一九六三年から七七年までのあいだに、基地の周辺部のあちらこちら合わせて三十三万平方メートルあまりが返還された。復帰から十年あまりのこのころには、市では基地対策協議会を設置し、跡地利用計画の検討にとりかかった。

(四) 基地をめぐる攻防

ゲート前の攻防

アパートから大学までの通勤途中に基地のゲートの前を通る。その佐真下ゲートは、早朝と夕方の通勤時間だけ開き、通勤以外の時間は閉まっている。他の二つのゲート、すなわち大山、野嵩のゲートにも行ってみた。まず、基地の北側、市役所近くにある野嵩ゲートでは、ゲートのまわりのフェンスにビニール・テープをくくりつけたり、さまざまな色の粘着テープで文字をつくったりして、抗議の意思をあらわす活動が盛んにおこなわれている。オスプレイが配備されることが発表された二〇一二年夏ごろから始まったとのことである。

ところがある時、日曜の朝、ゲートの前を通ると、それらのリボンやテープをはがしている一団の人たちがいた。そこで、私は話を聞いてみることにした。

そのグループの責任者の話によると、ボランティアの集まりとのこと、フェイスブックなどを通じて集まってきたという。基地司令官の許可を得てこうした活動をしているとのことだった。その理由をたずねると、「フェンスにリボンやテープをくくりつけるようなやり方は、抗議行動、平和運動として、好ましいやり方ではない、フェンスを汚すのではなく、別の方法で意見を表明するべきだ」という。この主張には一理ある。法的にいえば、フェンスも米軍の管理下にあり、財産の一部である。見渡してみると、そこに集まっていたのは

二十人ほどであったが、比較的若い人の姿が多く、家族連れもいた。沖縄以外から来ている人もおり、東京から来ていた若者もいた。「Okinawa Osprey Fan Club」と印刷されたTシャツを着ている若者が二、三人いたのでそれについてたずねてみると、鉄道マニアや自動車マニアなどのように、航空機としてのオスプレイのメカニズムに興味をもつ人たちの集まりだということだった。なるほど、プロペラの角度をかえて飛ぶティルト・ローターは、メカ・マニアの心をそそるものがあるのだろうと思ひ、その場では納得した。しかし、それはのちに疑念に変わる。

九時ごろからはじめて十一時前にはすっきりきれいになる。そして、翌朝からは、抗議側がリボンやテープをくりつけ、そして、また次の日曜の朝には、オスプレイ・ファン・クラブを含む人たちがそれをはがす。このイタチごっこがくりかえされていた。

野嵩ゲート前でリボンやテープで抗議の意思を表す活動をしているのは「普天間爆音訴訟」という裁判に関わっている人が中心である。ゲートから歩いて数分のところにその事務所がある。初めてこの事務所を訪れた際、年配の方から「本土から来たのか。沖縄戦のことなんか、どうせ知らないだろう。少しは勉強していきなさい」と沖縄戦について一通りの説明を受けた。説明というより説教に近かったが、だまって聞いた。

数週間後、基地の西側にある大山ゲートにも行ってみた。ここがメイン・ゲートらしい。ここでの抗議行動は早朝六時から始まると聞いていた。沖縄の大動脈である国道五八号線に面したその名も「交友園」(Friendship Park)という名の公園からゲートにつづく百メートルあまりの道路に沿って、抗議のプラカードや横断幕をかかげた人たちがいた。三十人ほどだっただろうか。通勤の米軍関係者に向けた抗議活動である。なかには「オスプレイ反対」「海兵隊は出て行け」といったことを英語で叫んでいる人もいた。どちらかというが高齢の人が多かった。

その一角に、通勤の車両に手を振っている一団を見つけた。どうも様子がちがうと思って近づいてみると、野嵩ゲート前で会った、テープをはがす側の責任者がいた。話しかけてみると、こちらでは毎週、金曜日の朝、こうした「激励活動」をしているという。日曜は野嵩ゲートのフェンスをきれいにする「フェンス・クリン作戦」で、金曜のほうは、大山ゲートで基地反対派の「心無い罵声」に対抗する「ハート・クリン作戦」なのだそうである。しかし、こちら側の若者のなかには、反対派に対して「心無い罵声」を浴びせている者もいた。看板と実態は必ずしも一致していないようだった。

この日、反対派を車からカメラで撮影しながら「激励派」のところにやって来た人がいた。車から降りると、菓子に入った箱を差し入れていた。以前からの顔見知りらしく、楽しげに談笑していた。それは私が以前から知っているアメリカ人で、今は海兵隊に勤務している。沖縄基地問題の起源を研究した論文で日本の大学で博士号を取得した例の人である。オスプレイ・ファン・クラブのTシャツを着ていた。

映画「標的の村」

オスプレイが配備される直前、普天間のゲート前では激しい抗議運動が展開され、オスプレイ配備を前に市民がゲートを封鎖するという実力行使に出た。参加した人たちの中に、沖縄本島北部の東村から来ている人たちもいた。その東村に広がる海兵隊北部演習場では六ヶ所のヘリ・パッドの建設が進められている。オスプレイ用とされるそれらは、同村の高江地区を取り囲むように計画されており、完成するとそれまでの静かな生活が脅かされるということで、反対運動が起きている。

高江と普天間でのオスプレイ反対運動を記録したドキュメンタリー映画が話題になり、静かに広がりを見せていた。地元のテレビ局が制作した「標的の村」というその映画は、テレビ用に撮影したものを劇場用に編集

し直したのだが、那覇の映画館で観たときは、場内からすすり泣きが聞こえた。沖縄だけでなく、東京でもそうだったとあとで知人に聞いた。

この映画は次第に話題を呼び、あちらこちらで上映されるようになっていった。沖縄でも私がいる間に、文字どおり手づくりの上映会が各地で開かれた。それぞれの経験やノウハウを伝え合い、上映会を広めるための集まりが沖国大で開かれ、「枯れ木も山のにぎわい」とばかりに私も顔を出したり、上映会に行ったりした。

作品の評価は高く、さまざまな賞を受けている。私の手元にはこの映画のチラシが三枚あるが、そのうちの一枚によれば、この映画は二〇一二年度テレメンタリー年間最優秀賞、第十八回平和協同ジャーナリスト基金奨励賞、第四回座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル大賞、ギャラクシー賞テレビ部門優秀賞を受けている。別のチラシには、これに加えて、平成二十五年市民間放送連盟賞九州沖縄地区報道部門最優秀賞と二〇一三年日本ジャーナリスト会議JCJ賞も受けており、さらに別のチラシでは、山形国際ドキュメンタリー映画祭二〇一三市民賞と日本映画監督協会賞、PROGRESS賞九州沖縄地区一位、日本映画撮影監督協会第二二回JSC賞、そして、第八十七回キネマ旬報ベストテン文化映画第一位にも輝いている。ここまで、実に十にのぼる。監督の三上智恵さんに直接確かめたところ、これまでに全部で十六の賞を受賞しているという。映画の内容を文字で伝える筆力は私にはないが、これらの受賞歴が何を物語っているかわかるというものだ。

近隣の声

ゲート前の抗議運動や映画「標的の村」が映し出している姿だけが普天間ではない。普天間基地の周辺で私が出会った近所の人たちの話からは、異なる一面が見えてくる。

基地には近いが滑走路からはやや離れた場所の住む主婦は、「このあたりは、騒音もそれほどひどくはない」ということもあって、基地には批判的ではなかった。さらに、「このあたりは大きな家が多いでしょ。地主がけっこういるから」と経済的理由を挙げて、「事故さえ起こさなければ、このままでもいい」と言っていた。十年余り宜野湾に暮らしているという男性は、騒音は気になると言いながらも、「沖繩のメディアは、基地反対ばかりを取り上げるが、そういう人ばかりではない。基地がなくなれば、困る人も多い」と、やはり主に経済的な理由から基地との共存を否定しない。地元出身で、基地の近くで飲食店を営む男性は、「住民の賛否は半々ぐらいだと思う。たまに客同士で話題になることもあるが、やはり賛否は半々のようだ」と言い、居合わせた女性客と「基地がなくなると、良いことが何で、良くないことが何なのか。それがそもそもよくわからない」と話していた。

調査をしたわけではないので「賛否は半々」かどうかかわからないが、こうした声を普天間で容易に聞くことができるのは確かだ。基地の閉鎖は求めつつも、辺野古への移設を容認する佐喜真淳・現市長が誕生した背景にはこうした声があるのだろう。伊波洋一・元市長の時代に途絶えた基地との交流を再開させ、積極的に進めている。

三 基地をめぐる政治

(一) 知事の埋め立て承認

沖繩に行く前から注目していたことがある。国が県知事に申請した辺野古埋め立てを仲井真弘多知事が承認するかどうかである。宜野湾で暮らし始めてしばらくすると、知り合いの新聞記者から、年内のうちに判断を

下することになりそうだという情報が入ってきた。

いよいよ表明するという十二月二十七日は、私も県庁に出かけて行つた。「辺野古新基地建設阻止」「埋め立て承認を許さない」などのほりや横断幕、そして「屈しない」というプラカードを手にした人びとで県庁のロビーは埋め尽くされていた。数百人はいただろう。「知事の裏切りを許さない」「県民は屈しない」とシユプレヒコールを上げ、かわるがわるマイクを持ち、承認しないよう求めるとともに、新たな基地建設に最後まで抵抗していくことを訴えていた。知人の顔を見つけ、いっしょに座り込んだ。沖国大の卒業生で、今は故郷の本部町で喫茶店を経営している。本部町は沖縄島の北部にあり、那覇までは二時間近くかかるだろう。十一月に本部町で映画「標的の村」の上映会を開いたので、「枯れ木も……」で私も参加した。本部町から持ってきたコーヒーをいただきながら、知事の会見を待った。

午後三時すぎから始まった知事の会見はロビーのテレビで見た。予想はしていたが、いや、予想以上に落胆するような内容だった。県庁を出ると、旧知の新聞記者が刷り上がったばかりの号外を配っていた。それによると、知事はその日の午前九時過ぎに、申請を承認する公印を押し、防衛省沖縄防衛局宛てに書類を発送し終えていた。

地元紙から原稿を頼まれた。あまり気が進まなかったが、思い切って書くことにした。以下に全文引用する（『沖縄タイムス』二〇一三年十二月三十日）。

要するに、おカネが欲しいんだね、オキナワは——。本土の国民の多くは、こう思ったことだろう。

沖縄国際大学の研究員として沖縄に来て三か月になるが、用事で本土に戻るたびに、周りから聞かれるのは「沖縄は本気か」ということであつた。

そこに今回の埋め立て承認である。県庁ロビーのテレビで会見を見たが、知事の理屈はわかりにくかった。翌日の新聞で確認したが、やはり説得力があるとは思えない。その結果、県内では怒りと失望を買い、本土では冒頭のように受け取られたことだろう。

圧力に屈したのか、予算に目がくらんだのか。いずれにせよ、問題は知事が法律・政治と経済・財政とを安易に結びつけてしまったということである。

では、基地負担の軽減はどうだろうか。普天間基地は五年以内に運用停止になるだろうか。その可能性はゼロである。政府は県外移転を検討することなく、辺野古での基地建設につき進むが、五年以内の完成はありえない。

新たな基地ができるまでは海兵隊が運用を停止することがありえないことは言うまでもない。そんなことをしたら海兵隊は存在意義そのものを疑われてしまう。ただでさえ、沖縄駐留の必要性は、本国にも疑問の声があるのだから。

五年以内の運用停止は、政府に強引な突貫工事の口実を与えることになりかねない。そうなれば、環境保全もままならなくなる。

オスプレイの訓練移転もたいした進展は期待できない。オスプレイの日米合意違反の飛行が常態化していることは、私もこの目で何度も確認しているが、政府は何もしない。その上、安倍首相は靖国神社参拝によって米政府の信頼を失っており、そんな政権の要望に応じるはずもない。つまり、運用の面でも沖縄が得るものはほぼゼロだろう。

結局のところ、沖縄はカネ以外にほとんど得るものはない。こんなことは知事もわかっているはずだ。政府の回答に接して「驚くべき立派な内容」と見苦しいまでにはしゃいだのは、いったい何だったのか。

本土では、沖縄県民とは少し違った意味で、大きく失望したことだろう。百歩ゆずって、承認は避けがたいのだとしても、認め方、はつきり言えば「負けっぷり」が問題だ。力に屈し、カネにころんだと県民・国民の目に映らないような承認のしかたを考えるべきであった。わかりにくい理屈を並べ、安倍政権を「沖縄への思いが強い」と持ち上げる知事の姿だけが、印象として国民の記憶に残る。

もはや「沖縄の本気」を問う人はいないだろう。少しばかりのカネと引き換えに沖縄が失うものはあまりにも大きく、日米安保体制のゆがみは続く。有史以来の驚くべきみじめな仲井真知事の姿は、沖縄にとっても、日本全体にとっても、悲しむべきものであった。

安倍政権の示した沖縄振興策を「有史以来」と絶賛した仲井真知事であったが、実態はまったくそうでないことは誰の目にも明らかだった。普天間基地の「五年以内の運用停止」もまったく目処の立たないものである。要するに、ほとんど中身の無いものに等しい。

琉球新報と沖縄テレビ放送の合同世論調査によれば、埋め立て承認について、支持が三四%、不支持が六一%であった。

(二) 名護市長選挙

年が明け、辺野古埋め立てを承認した知事に対して、県議会は辞任を要求する決議を可決したが、辞任にまでは追い込めなかった。知事が埋め立てを承認した後、次の焦点は、地元の名護市の市長選挙に移った。

市長選の公示直前の一月十日、民間シンクタンク「新外交イニシアチブ」主催のシンポジウムが名護市で開催された。知人の車に同乗させてもらって私も名護に出かけた。打ち上げの宴席で、私は稲嶺進名護市長に質問

した。「稲嶺恵一さんは、知事時代には基地問題が頭の中の七割を占めていた、酒を飲まなければ眠れなかった、と述懐しています。市長はいかがですか」。私は市長も同じような状態ではなからうか、と予想（と心配）をしていたのだが、返ってきたのは意外な答えだった。

そのようなことは全くありません。辺野古への建設には反対と決めていますから、迷うことも悩むこともありません。稲嶺恵一知事は国と交渉していたから、悩むことが多かったのでしょうか。

あっけらかんと（見えた）答える市長に、やや拍子抜けしたが、同時に、これが今の沖縄に必要なものかもしれないと思った。どんなに厳しい条件をつけようとも、条件は所詮、条件である。受け入れることもありうるということであり、いかに多くを国から引き出すかの駆け引きと見られる。特に遠く離れた本土の国民から見れば、その本音が賛成であろうが反対であろうが、同じことである。現代民主政治は多かれ少なかれ「劇場型」にならざるを得ず、何を国民に見せるかが重要である。争点・焦点が何であり、白黒の分かれ目で何であるかを明瞭に見せなければならぬ。それまでの言動から私は、稲嶺進さんという人は、あまり駆け引きのできる人ではなさそうだという印象を抱いており、それは政治家としての弱点だと思っていたが、間違いだった。本来は政治家としての弱点かもしれないが、この人はそれを逆に強みとしている。

政府と自民党は、大物を次々に名護に送り込んだ。人だけでなくカネも注ぎ込もうとした。石破茂・自民党幹事長は投票日の直前に名護に乗り込んで、名護市に特化した五百億円にのぼる振興基金の創設をぶち上げた。応援を受けた末松文信候補は「誠にありがたい」と歓迎したが、有権者は動かなかった。仲井真知事も末松候補の応援に行ったが、知事の周りには人が集まらなかったという。

現職の稲嶺進候補が一万九千八百票余りを獲得して、一万五千六百票余りの末松候補を退けた。この四千票差を地元紙は「大差」と評した。前回よりも票差は開いている。しかし、大差と見るかどうかは難しいところだ。それはともかく、琉球新報の記者から興味深い話を聞いた。事前の世論調査や投票日の出口調査では、もっと差が開いていたというのである。二倍近い開きがあったにもかかわらず、開票してみたら、票差はそれほどでもなかった。

民意とは何か。単なる意見や意向のことなのか、意を決して実行するという意味の意志や決意の現れとしての投票にこそ、それを見るべきか。

しばらくして、久しぶりに大山ゲートに行ってみた。以前と同じように、抗議行動をしているグループがいて、「激励」行動をしている一団もいた。しばらくすると、抗議側のひとりが話しかけてきた。名護市長選挙の話になり、「開票が始まるとすぐに、ヤマトの友人から、おめでとう、と電話があった。こういう声に励まされる。沖縄だけでは運動は続けられない」とのことだった。「われわれの活動にあんたも加わってくれれば一番いいが、そうでなくとも、これからも関心を持ちつづけてほしい」と言うので、そのつもりだ、と答えた。別れ際に「ところで、あんたはものを書く人か。もしそうなら、ここのこともどこかに書いてくれ」と言われた。

(三) 政治とカネ

安倍政権の示した予算増額に欣喜雀躍してみせた仲井真知事と、それとは対照的に、石破幹事長の五百億円構想になびかなかった名護市民の姿が、沖縄の今後を考えるうえで重要だと思った。選挙後、例によって地元

紙には「識者評論」が掲載されたが、私の目を引いたのは、川瀬光義・京都府立大学教授の一文であった。財政学を専門とし沖繩の自治体財政にも詳しい川瀬教授は、漫然と政府資金を投入するだけでは地域の振興はできず、四年前の敗北を総括しないまま漫然と同じ政策を打ち出したところに末松陣営、ひいては政府の敗因を求めた（『沖繩タイムス』二〇一四年一月二十六日）。

名護市に大量の政府資金が「振興策」として投入されたにもかかわらず、市民の暮らしは向上しておらず、財政膨張の帰結を市民は認識しているという背景があるということである。財政の専門家の分析に感心すると同時に、名護とはどのようなところか、私は興味を引かれた。行政学を専門とする沖国大の佐藤学教授から、名護はかつて「逆格差論」を掲げていたことを教えてもらい、名護に出かけて行った。

沖繩が本土復帰を果たした後、海洋博が開かれ、にわか開発ブームが起こった。本土資本による土地の買い漁りの嵐が沖繩を襲ったが、その波に吞まれないよう投機からは距離を置き、本土のカネを呼び込むのではなく、地域の特徴を生かす方向への価値観の転換を掲げたのが「逆格差論」である。この構想は当初の狙い通りの成果を上げるに至らないまま、市長の交代とともに、構想自体も葬られてしまった。しかし、ひよつとしたら、まだ名護市民の中にはその水脈が途切れることなく続いているのではないだろうか。基地付きの振興予算に頼らずとも、身の丈に合った地域の振興や街づくりができることを名護市が示すことができれば、沖繩の今後には何らかの示唆を与えることにもなるだろう。

名護市民会館の入り口には、立派（？）なアグー豚の銅像が立っている。一度は絶滅の危機に瀕した沖繩在来のアグー（名護ではアグー、あるいはアグと呼ぶ）は、今や沖繩を代表するブランド豚である。声を大にして言いたいのだが、アグー豚を蘇らせたのは名護である。基地にまつわるカネが沖繩社会をいかに歪めているか、暮らしているうちに少しずつ見え始めていた折でもあったので、宮古や八重山などの離島地域と同じ

ように、那覇・首里から差別されてきた本島北部の名護にこそ、沖縄の未来を見出したいという気持ちにおそわれた。

おわりに

島の土を踏んだとたんに

「ガンジューイとあいさつしたところ

はいおかげさまで元気ですとか言って

島の人は日本語で来たのだ

郷愁はいささか戸惑いしてしまって

ウチナーグチマデイン ムル

イクサニ サツタルバスイと言うと

島の人は苦笑いしたのだが

沖縄語はじょうずですねと来たのだ

沖縄を代表する詩人、山之口猷の「弾を浴びた島」という作品である。一九五八年に三十四年ぶりに故郷の沖縄の土を踏んだ時のことをうたったものだ。「お元気ですか」と沖縄の言葉でたずねたのに対して、共通語で返答がかえってきたことにとまどい、「沖縄方言までも、すべて、戦争でやられたのか」と嘆いた（琉球文化研究所編『山之口猷 詩と語り』琉球館、二〇一三年）。

若いころから親しんできた山之口獭であるが、短い間とはいえ沖縄に暮らしてみると、また、違った味わいを感じるものだ。

『「やまとぐち」は家になく、里にもなく、学校だけにあった』というのはエッセイストの古波蔵保好である。『方言札』が自分をねらっていると知っていても、他人行儀の『やまとぐち』など、友だちに向っていえなかった』という。「やまとぐち」とは日本本土の言葉という意味であるが、沖縄では「普通語」とも呼ばれたいわゆる標準語のことである（古波蔵『沖縄物語』、新潮社、一九八一年）。

普天間高校の教壇に立ったこともある詩人の高良勉も「日本語を使うのは学校の授業だけで、休み時間や家に帰ると『ウチナーグチ（沖縄語）』と呼ばれる琉球語が中心」だったという（高良『沖縄生活誌』、岩波書店、二〇〇五年）。

沖縄の言葉を「琉球語」と呼ぶのは沖縄に対する差別とされていた時代がある。沖縄独立論が盛んになり、琉球民族独立総合研究会なる組織までできた現在では、むしろ「琉球語」が正しい名称であって、方言呼ばわりするのは「差別」と糾弾されかねないだろう。言葉は思想であり、かつ政治である。

首里城の開園にあわせて一九九二年に開催された沖縄南部の南風原文化センターの企画展には「役人が農民をたたいたムチ」や「年貢を払うために働きすぎて倒れた農民」の人形が展示された。編集者の新城和博は「なかなかのセンスだなあ」といたく感心したという。「南風原の風」というその企画展の名称は、翌年放送されたテレビドラマ「琉球の風」をもじったものというおまけ付きである（新城『ぼくの沖縄〈復帰後〉史』、ポニーダインク、二〇一四年）。

この南風原文化センターの企画展が示したものは、沖縄を理解するうえで不可欠の一面である。普天間で暮らすという経験をしなかったら、その意義を理解できずに、この部分を読み飛ばしていたにちがいない。ここ

に目を留めることができただけでも、普天間で暮らした意味はあつたのだと思う。